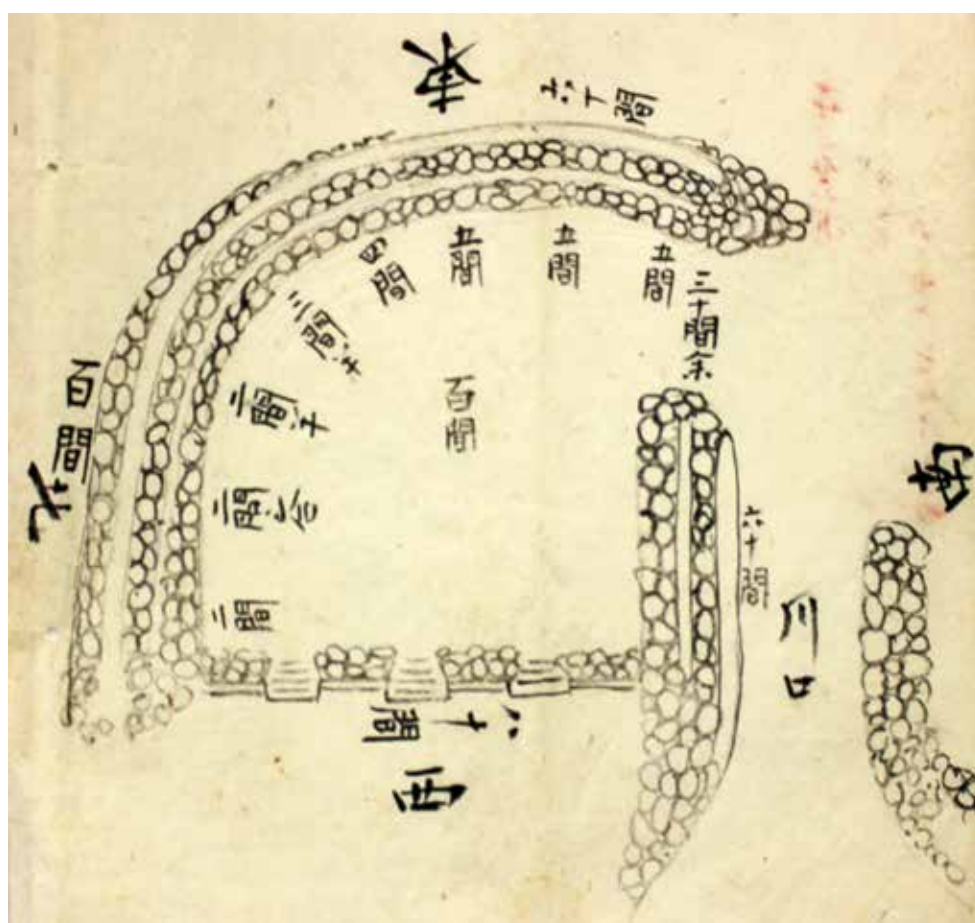


べっふの文化財

No.49
平成31年3月

一別府築港一



柴田惣左衛門の別府港の設計図（明治2年1869）

別府市文化財保護審議会
別府市教育委員会

目 次

はじめに	1
別府生産会所と別府築港	2
別府築港	2
別府築港と別府地方札	5
内海航路の開設	8
波止場神社	11

(別府港築港関係歴史資料)

別府新波戸築立 柴田宗右衛門積書写	(一)
波戸場嘆願書	(四)
波戸場拝借金添証文之事	(六)
益丸御届書・触書(手書広告)	(七)
金比羅丸・大分丸乗船券 別府町実測図	(八)
別府築港之碑	(九)

はじめに

御一新により、元号が慶応から明治に改元されて今年度で 150 年の節目を迎えた。

抑、元号の「明治」は易経の「聖人南面して天下を聴き明に嚮いて治む」を出典としている。維新の十傑の一人である岩倉具視が松平慶永（春嶽）に命じ、菅原家から上がった佳なる勘文を籤にして宮中の賢所で、元号の複数案の中から天皇が自ら選んだ。

これが、日本での一世一元制の最初の元号となった。

御一新により、天領別府、浜脇、朝見、田野口の 4 ケ村は熊本藩主細川家預りの高松代官所（大分市）支配下にあったが維新政府は幕府領を没収、明治元年（1868 年）4 月 25 日、日田県を設置し、別府を含む 4 ケ村は日田県に属することになった。

明治元年（1868 年）閏 4 月 25 日、初代日田県知事に薩摩藩出身の松方正義（33 歳）が着任した。松方正義は明治 2 年（1869 年）1 月 20 日県下巡視のため日田より別府を訪れ、鄙びたこの出湯の里が将来発展することを予測し別府港築港を促した。

直ちに、別府村の長老日名子太郎兵衛等が謀り、棟梁柴田惣左衛門を佐伯より招致し設計書を作成、別府港築港の嘆願書にこれを添付して日田県知事に申願した。同年 11 月に至り、許可の指令に接し、又許可と同時に工事費 8 千両を貸与され明治 3 年（1870 年）2 月 23 日別府港築港工事が起工されるはこびとなった。別府港は明治 4 年（1871 年）5 月 30 日竣工したが、築港に要した費用は総額 2 万両に達した。

別府は、明治時代に都市基盤整備を積極的に推し進めて来たが別府港の竣工は、その嚆矢であった。就中、別府港の竣工は、関西方面と関西航路によって直結し、これが別府発展の起爆剤となったと言っても過言ではない。

この巨大プロジェクトを別府村民の有志のみで 2 万両の大金を別府生産会所から貸与を受け築港を成し遂げた事実には只々感服する次第である。

現存する資料を基に別府港に焦点をあてながら、この巨大事業に別府生産会所の果たした役割は大である。従って別府生産会所発行の「別府札」（銭券）の事や、私札「波戸場勤札」などの泉貨についても触れてみたい。



昭和 15 年頃の別府港

別府生産会所と別府築港

慶応4年(1868年)5月15日、新政府は「^{だじょうかんさつ}太政官札」の発行を決定した。^{きんきつ}金札ともよばれた太政官札は、通行期限13年の^{ふかんしへい}不換紙幣で、藩や民間の農・商に貸付け「富国の基礎」をつくる資金が目的であった。貸付けを受けた者は、13年間、毎年その1割に当る金額を返納するという仕組みである。その運営のために設けられたのが、大阪府の商法会所や日田県の生産会所である。

日田県では、松方正義知事の着任から5ヶ月後の明治元年(1868年)11月、日田^{くま}隈町に日田生産会所を設けている。ついで明治2年(1869年)1月、別府村秋葉町、宇佐四日市村にも生産会所を開いた。

別府生産会所の重役には、日田隈町の商人^{りゅう}劉藤兵衛、森莊八、大分郡原村の間藤幸治、大分郡乙津村の佐藤和平治が任命された。資金は日田県より借り受けた現金3万2200両、太政官札2万6338両、銅銭690文であった。これを資金に日田県支配下の国東、速見、大分、直入の四郡内に貸付け、産業をおこし、利益をはかろうとするものであった。

別府築港の建設資金として、別府生産会所より別府村の有志40人が8千両、6千両、6千両の総額2万両を借り受けた。

別府築港

明治2年(1869年)1月20日、日田県知事松方正義は県下視察のため山香、小浦を経て別府へ着き「^{たばこや}篋屋」に投宿した。前年の明治元年閏4月25日、日田県知事へ赴任した知事にとって、管内の民情を知るといふ目的のほか、「富国の基礎」をつくる資金として、政府が発行した^{だじょうかん}太政官札の貸付け先をさがす目的もあった。

温泉地別府には、嘉永2年(1849年)に造られた延長15間(約27メートル)ほどの防波堤のある港があった。もっと大きい港を造り海上交通の便をはかったら、別府の発展が期待できる。太政官札を貸付けることによって、政府の政策も実施できる。こうして松方知事は、別府生産会所設立のため同行していた劉藤兵衛、森莊八、間藤幸治、佐藤和平治に、別府築港を働きかけた。

別府生産会所の重役4人は、別府の有力者である府内屋の日名子太郎兵衛、米屋の堀清左衛門、若松屋の松尾彦七、計屋の大野六兵衛らに、別府港築港について相談を持ちこんだ。

築港の設計見積りは佐伯の柴田惣左衛門に依頼した。

波止場160間(約288メートル)、受波戸60間(約108メートル)、総工事費1万2294両1分2朱という計画である。明治2年(1869年)11月、この計画は日田県知事から許可され、工事費8千両の貸付けも許された。

明治3年(1870年)2月23日から工事に着手したが、当初の計画では港が狭いということになり、許可をえて、堤防を20間ほど広げることになった。

工事に使用する石は、府内藩領の高崎山海岸の石を無料で貰う予定であったが、府内藩の許可が得られなかった。

そのため高崎山の一部を掘って石を手に入れたほか、別府港周辺、朝見、浜脇、田ノ湯、野口原、亀川、小浦方面から石を運ばねばならず、工事は困難な中にも急速に進展したが経費がかさんだ。工事の半ば進んだ9月6日・7日に別府を襲った台風のため、工費中の堤防44間(約80メートル)が崩ずれ大被害を被むった。そこで、再び日田県へ請願し6千両を借り、工事を再開したが、さらに6千両を借り受け、明治4年(1871年)5月30日に竣工した。



別府港扇図面

防波堤の東西100間(約180メートル)、南北80間(約144メートル)の港である。工事費の総額は2万両、工事の棟梁は、佐伯狩生村小福良の嘉四郎、佐賀関の与作があたった。

工事の進行にあたっては、取締方、指揮世話兼会計方、着到方、沖掛、賃銭渡方、旅人取締などの諸係に48人にのぼる別府の商人が参加するという地域あげての大工事であった。

注:別府市誌(昭和60年3月8日発行)456ページに記述の別府生産会所の重役「間藤幸右衛門(幸三)」とあるが別府村波止場拝借金添証文に自著した名前「間藤幸治」に改めた。

同458ページに記述の港の工事の棟梁は「佐伯福良浦」とあるが、福良の地名は、白杵と津久見に存在するが佐伯市等調査の結果「佐伯狩生村小福良」に改めた。

別府港の築港に携わった別府村の任務遂行者一覧

取締方	里 正 高倉定三	大 阪 屋 劉藤兵衛	鍋 屋 森宗兵衛
指揮世話兼 会計方	府 内 屋 日名子太郎兵衛 丸 屋 野田久左衛門	豊 後 屋 河村傳左衛門 煙 草 屋 荒金宗十郎	米 屋 堀清左衛門 松 屋 佐藤源兵衛
着到方	満 足 屋 浅利喜兵衛 計 屋 武田長兵衛 石 見 屋 安部徳兵衛 戌 亥 屋 友永小三郎 糸 屋 荒金仁右衛門	計 屋 武田孫兵衛 関 屋 甲斐庄三郎 平 野 屋 石井格太郎 紀 野 屋 金居與助 藤 屋 佐藤清三郎	日 野 屋 橋本玄八 生 田 屋 永井安次郎 竹 屋 望月藤三郎 住 吉 屋 永井長右衛門
沖掛	米 屋 佐藤忠左衛門 中 間 山崎辨右衛門 油 屋 甲斐仁右衛門 寶 壽 丸 田邊久兵衛 島 屋 和田惣兵衛 讃 岐 屋 日名子長左衛門	小 松 屋 河村熊吾 大 向 片野卯八 奥 屋 片野五左衛門 天 神 丸 日名子彦兵衛 正 木 屋 溝口久右衛門	茶 屋 河村忠右衛門 板 屋 甲斐峰太郎 仲 野 屋 安部安右衛門 平 野 屋 秋月新兵衛 小 西 屋 河村勘助
賃銭渡方	萬 屋 神澤儀助 濱 屋 安部清助 枅 屋 岡久左衛門	若 松 屋 松尾彦七 亀 屋 安部友蔵	計 屋 大野六兵衛 日 出 屋 植木悦次郎
旅人取締	飴 屋 在原嘉次郎	鹽 飽 屋 荒金作太郎	

別府村の有志48名

別府港（波止場）関連年表

年号 月 日	西暦	事 項
慶応4年5月15日	1868	新政府の経費を賄うため由利公正の発案で「太政官札」を発行。当時最新の銅版印刷で作られた。
明治元年4月25日	1868	日田県を設置、別府を含む4ヶ村は日田県に属する。
明治元年閏4月25日	1868	初代日田県知事に松方正義が着任する。薩摩藩出身33歳
明治元年8月	1868	日田県庁別府支庁を設置する。
明治2年1月20日	1869	松方正義県内視察のため日田から別府を訪れる。別府港築港工事を促す。
明治2年	1869	別府生産会所を開設。資本金5万8千両余。
明治2年2月	1869	佐伯の柴田惣左衛門、別府波止場築立積書を作成する。
明治2年	1869	別府港築港の嘆願書を日田県知事に提出する。
明治2年5月	1869	別府生産会所「別府札」（銭券）を発行する。
明治2年11月	1869	松方正義、別府村から申請されている別府港築工を許可する。又工事費として8千両を貸与する。
明治2年11月15日	1869	新政府の経費を賄うため「民部省札」を発行する。「太政官札」が高額で日常取引に不便を来したため補助的役割で発行。
明治3年2月23日	1870	別府港築港工事起工される。
明治3年6月	1870	波止場神社創建。
明治3年9月6日	1870	6・7日の両日の大暴風雨により別府港の堤防約80メートルが崩壊する。
明治3年12月	1870	別府港の堤防約80メートル崩壊に伴い追加6千両の貸与を出願する。
明治3年12月19日	1870	第2代日田県知事に野村盛秀着任する。薩摩藩出身39歳。
明治4年	1871	別府港の当初の計画では港が狭いということで波止場を20間ほど広げることになり、追加6千両を貸与される。
明治4年	1871	亀川村、脇才衛門、波止場人夫賃札「波戸場勤札」を発行する。換金は1人銭70文と定められていた。
明治4年5月30日	1871	別府港が竣工する。東西100間、南北80間
明治4年11月14日	1871	大分県成立、初代大分県令に森下景端着任する。岡山藩出身47歳。
明治6年5月30日	1873	「大阪開商社」の西洋型木造蒸気船「益丸」18トン別府港に寄港する。
明治6年6月3日	1873	「益丸」に関し、別府村日名子太郎、副戸長橋本巖、船問屋の届出を大分県令に行う。
明治10年4月2日	1877	西南の役で府内城の県庁守備者を救うため軍艦「浅間」が別府港に寄港する。
明治17年5月	1884	大阪商船設立

別府築港と別府地方札

江戸時代は幕府によって発行された貨幣が経済をささえていた。又、各藩では藩札を発行して、藩内の経済を発展させたところもあった。

別府地方は天領であったので、各藩の藩札が使われていたが府内藩の藩札が最も多く使用されたとされている。

その他、各地の豪商は、原料や商品の購入に便利な「私札」を発行していた。

別府地方で、特に「私札」が多く発行されたのは、明治初年であった。現在まで発見されている私札は、米屋札（別府村）・明礬札（鶴見村）・^{たばこや} 笹屋札（別府村）・燈油札（別府村）・醤油札（亀川村）・細工屋札（平田村）・^{せいえんさつ} 青蕙札（亀川村）・富士庄札（鉄輪村）波戸場勤札などである。

又、明治2年（1869年）5月から明治3年（1870年）にかけて別府生産会所が発行した「別府札」（銭券）は準公札的なものであるが、ここでは別府築港と係りがある「別府札」と私札である「波戸場勤札」について紹介する。

（1）準公札 別府札（銭券）

別府生産会所は、土地の開発・産物の増産・別府築港の創設等に力を注いだが一面向替会社を企て、御領四郡運用札の発行方を日田県に請願した。

※四郡：速見郡・国東郡・大分郡・直入郡

「…近時小銭不足は勿ち差支え候に付小資遅転円滑…特産物（生姜・七島蕙）輸出促進候儀と存じ奉り候…小額切手発行方御聞き置き仰せ付け被下度願上奉り候」 己己二月 別府生産会所 日田県知事

明治2年（1869年）5日日田県より別府五銭札の発行が許可となり、日田県庁は準備金八万両を補助金として下附している。別府生産会所は直ちに準備にとりかかり次の種類の札を発行した。

しかし、新政府が明治2年（1869年）11月15日に「民部省札」を発行したため別府札は流通不能状態となった。

別府札発行内訳

種類	初期札	第2次版木	第3次版木
五銭 拾匁	赤色	淡茶色	白札
五銭 五匁	赤色	淡茶色	青札
五銭 三匁	赤色	淡茶色	赤札
五銭 一匁	赤色	淡茶色	白札
五銭 五分	赤色	淡茶色	青札
五銭 三分	赤色	淡茶色	赤札

(表)



(裏)



(明治2年5月発行)
別府生産会所発行の「別府札」(錢券)
外山健一所蔵

(表)



(裏)



(慶応4年5月15日発行)
新政府発行の「太政官札」
外山健一所蔵

(明治2年11月15日発行)
新政府発行の「民部省札」
外山健一所蔵

(表)



(文政2年～文政11年)
「文政小判金」
(鑄造量 11,043,360 兩)
外山健一所蔵

だいじょうかんさつ
「太政官札」内訳

発行種類
金 拾兩
金 五兩
金 壹兩
金 壹分
金 壹朱

みんぶしやうさつ
「民部省札」内訳

発行種類
金 貳分
金 壹分
金 貳朱
金 壹朱

(2) 私札「波戸場勤札」

明治4年(1871年)に発行された私札「波戸場勤札」は、別府港波止場で働く人夫賃札である。波戸場勤札の裏面に「壹人銭七拾文定」と記されているとおり、人夫一人に付金七拾文の換金が出来た。工事者は亀川村と平田村であった。

また、金の引受人は、亀川村米屋脇才衛門を含む4人で、波戸場勤札は、夫五人札・夫拾人札・夫三拾人札の3種類が発行されている。この3種類すべてが白色札である。

注：波戸場勤札の左端上部の一部が切断されているものはすでに換金済の証と考えられる。なお、「俵屋札」では、金額の上に「水」と墨書されているものは換金済の札である。



波戸場勤札(拾人札) 外山健一所蔵



波戸場勤札(三拾人札) 外山健一所蔵



波戸場勤札(五人札)『別府市誌』1985



別府生産会所 重役 佐藤和平治
(佐藤史彦氏提供)

内海航路の開設

明治6年(1873年)6月、別府—大阪間の定期航路が開かれ、大阪開商社の「益丸」(西洋型蒸気船18トン)が別府港に入港した。益丸は、毎月3日午前6時に別府港に出航、三津濱(愛媛県)、鞆の津(広島県)、多度津(香川県)を経て、大阪へと向った。月に一回ではあったが、瀬戸内海航路が開かれたことで、別府は温泉町への巨歩をあゆみ始める。

同8年(1875年)には、橋本孫六、堀礼蔵、大野六郎治、山田耕平らが「安全丸」、「満珠丸」、「金比羅丸」、「凌波丸」(後に大分丸)を、別府—大阪間に就航させ、早くも競争時代に入った。

橋本孫六らは、後に合同して豊栄舎をおこしたが、同13年(1890年)には荒金猪六らの別府会社が、「山城丸」(76トン)を就航させた。(明治14年の『大分県統計書』によると、「菌洋丸」「山城丸」「第2大分丸」が別府湾を定繁地にしている)

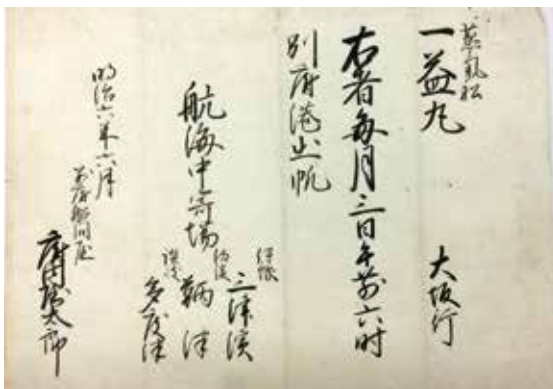
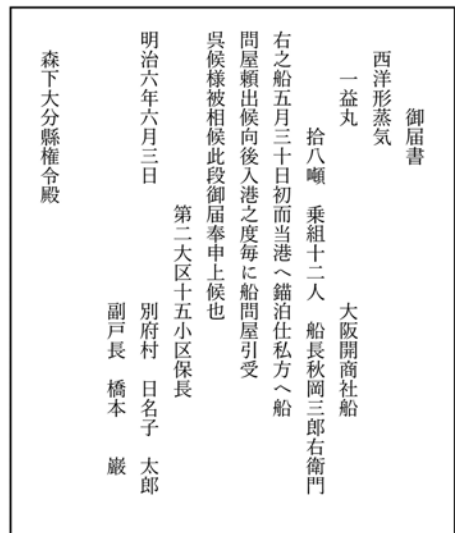
ついで、明治15、6年ごろ、岡山開行社の「運輸丸」(外輪船)、「幸運丸」や大西定兵衛の「大分丸」、「第1白杵丸」、「第2白杵丸」などが加わり、さらに激しい競争となった。

大西定兵衛は、大阪—別府間を延長して、佐賀関、白杵、佐伯経由の細島(宮崎県)行としたが、この航路にも宮崎喜兵太の「佐伯丸」、「亀鶴丸」や平尾喜平治の「平穩丸」が就航して、競争はますます激化するばかりであった。

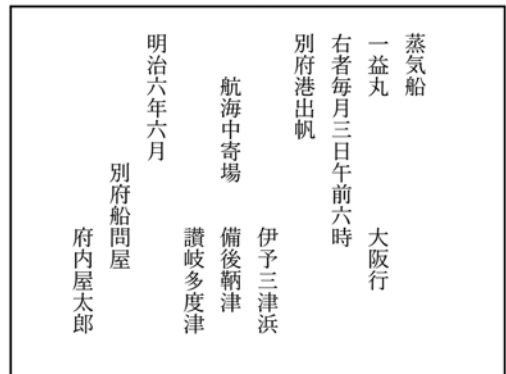
内海航路に就航する船が増え、海運ラッシュ時に入るとやがて各船問屋とも窮状に陥った。そのため明治17年(1884年)5月、船問屋を統合した大阪商船の設立で、この乱立状態を收拾することになった。



「御届書」別府市立図書館蔵



「蒸気船益丸」別府市立図書館蔵



明治初年に内海航路に就航した主な船舶

船名	総トン数	建造又は進水年
えきまる 益丸	109 総トン	明治 5 年（1872 年）5 月進水
こんびらまる 金比羅丸	200 総トン	明治 3 年（1870 年）9 月進水
あんぜんまる 安全丸	300 総トン	明治 8 年（1875 年）進水
りょうはまる 凌波丸	120 総トン	明治 11 年（1878 年）進水（後の大分丸）
やましろまる 山城丸	147 総トン	明治 10 年（1877 年）10 月進水
かんようまる 齒洋丸	不明	不明
まんじゆまる 満珠丸	1,661 総トン	明治 16 年（1883 年）2 月進水
うんゆまる 運輸丸	128 総トン	明治 11 年（1878 年）7 月進水
へいおんまる 平穩丸	199 総トン	明治 12 年（1879 年）12 月進水
さいきまる 佐伯丸	195 総トン	明治 13 年（1880 年）1 月進水
きかくまる 亀鶴丸	226 総トン	明治 14 年（1881 年）11 月進水
だいうすきまる 第 1 白杵丸	不明	不明
だいうすきまる 第 2 白杵丸	220 総トン	明治 14 年（1881 年）2 月進水
こううんまる 幸運丸	2,876 総トン	明治 16 年（1883 年）3 月進水
だいさいまる 大西丸	3,572 総トン	明治 25 年（1892 年）6 月進水

出典 公益財団法人 日本海事科学振興財団「船の科学館」
『別府市誌』昭和 60 年版
『大分県統計書』

別府港（明治 10 年）の移出入物資

移出物資	移入物資
生姜・米・生苳・炭・竹等	砂糖・備後表・塩・大根・木材・魚・反物・鉄等

出典 『別府市誌』昭和 60 年版

(2) 新政府の軍艦「浅間(あさま)」別府港入港

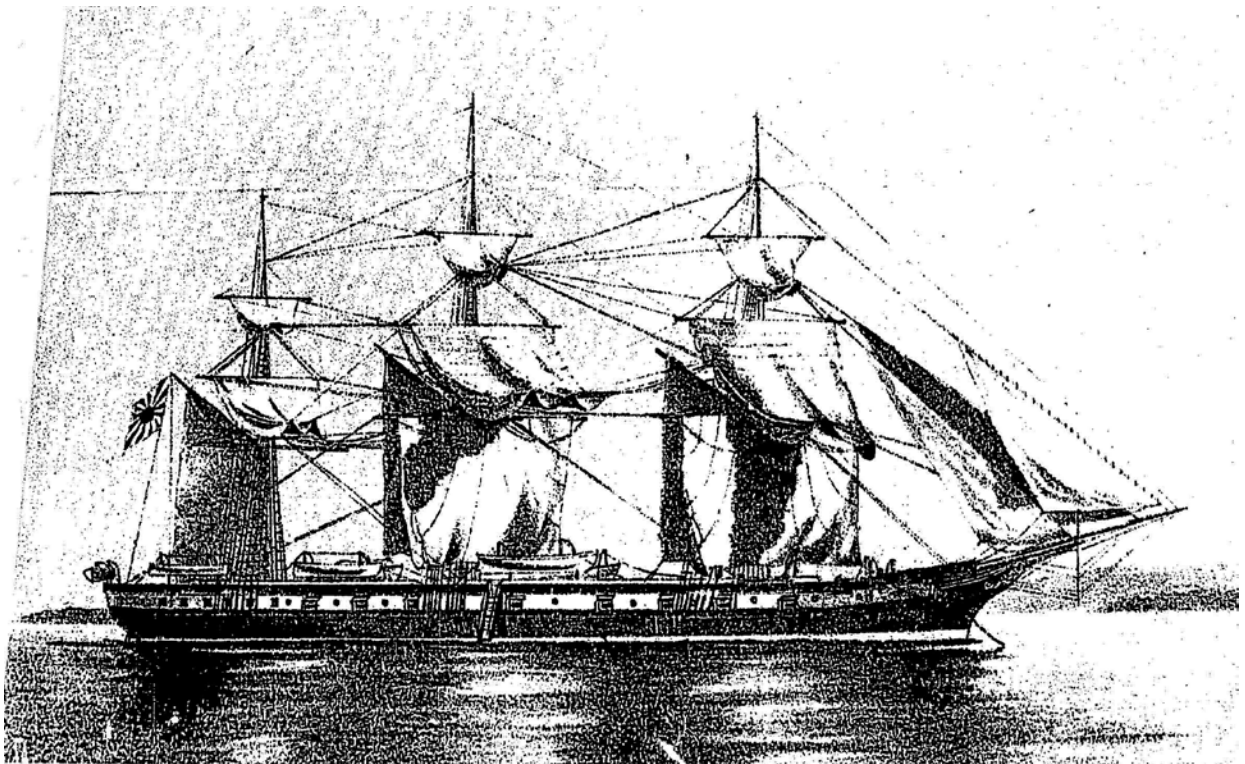
西南戦争の最中明治10年(1877年)別府の矢田宏ら中津隊(この名称は西郷軍に合流してから)、府内城にある大分県庁を襲撃する。県庁の守備兵は官吏、巡査など総勢150人(このうち銃を持った者50人)であった。

大分県知事香川真一は、日田の総督本営に出兵を要請、熊本の官軍にも救援を求める。

明治10年(1877年)4月2日府内城の県庁守備者を救うため軍艦「浅間」別府港に入港する。

<軍艦浅間の概要>

コルベット「浅間」3檣シップ型、木製。明治元年(1868年)フランスで竣工。排水量1,422トン、長さ66.7メートル、幅9.3メートル、吃水4.1メートル、主機双塔型、出力300馬力、兵装砲12門。開拓使が購入して「北海丸」と称していたものを明治7年(1874年)7月海軍が開拓使より受領し、軍艦となったもので、同10年(1877年)「浅間艦」と改名した。萩の乱、西南戦争に従軍、のち砲術練習艦となった。同24年(1891年)3月3日除籍、横須賀水雷隊攻撃部附属として使用後売却した。



軍艦「浅間」排水量1,422トン(公益財団法人船の科学館蔵)

波止場神社

(1) 波止場神社の建家

別府市元町 16 番 14 号に波止場神社がある。明治の初め、廃藩置県の政治改革で幕府領別府が日田県となり、初代日田県知事松方正義は将来、鄙^{ひな}びたこの出湯の里が繁栄することを予測した。

そのために早速取りかかったのが海上交通の重要性に着目し波止場造りだった。

その時、築港工事や内海航行の安全を祈願して勧請^{かんじょう}したのがこの「波止場神社」である。明治 3 年 (1870 年) の創建である。拝殿は入母屋造^{きごう}棗瓦妻入りの建物である。梁間 3 間、桁行 2 間の吹放しで正面には「波止場神社」と松方正義の揮毫^{きごう}になる木彫りの額が掲げられている。

向拝の木鼻や手挟みには波の紋様が刻まれ、格天井には明治 4 年 (1871 年) 駐春園主人隲石^{しよせき}生の手になる花鳥、十二支が描かれていた。本殿は 1 間社流造^{ほうほんし}棗瓦葺で彩色され、拝殿につながっている。

(2) 別府築港之碑文

波止場神社^{けいだい}境内には、明治 40 年 (1907 年) に周辺の玉垣や鳥居が造られた。さらに、大正元年 (1912 年) 8 月に第 2 代別府町長吉田嘉一郎は、同社境内に「別府築港之碑」^{こんりゅう}を建立した。この碑文の題字は築港当時、日田県知事だった松方正義候に揮毫を依頼した。

碑文は至^{しよせき}って丹念に刻まれ「庶績咸^{しよせき}濼マリ」(書経)や「報本反始」(札記)など、漢学素養が常識だった明治初年に合わせた表現を求めたふしも感じられる。



波止場神社 石碑



波止場神社



波止場神社 社殿 (格天井)

『別府築港之碑』

(正面) 別府築港之碑

正二位 大勲位侯爵 松方正義 書

(裏面) 別府築港之陰

王政維新百廢悉舉リ庶績咸熙マリ皇澤賈ヒ敷ク而シテ別府築港ノ舉モ亦實ニ端ヲ明治ノ初メニ發シタリキ初メ松方侯爵ノ日田縣ニ知事タルヤ管内要地ニ生産會所ヲ設ケテ殖産興業ヲ奨勵シ明治二年管内ヲ巡視シテ別府ニ至リ温泉ノ盆涌ヲ觀テ將來ノ繁榮ヲ豫測シ意ヲ海上運輸ニ注キ論スニ築港ノ急務ヲ以テセラル是ニ於テ別府生産掛日田郡隈町劉藤兵衛同町森宗兵衛其意ヲ體シ同僚大分郡原村間藤幸右衛門同郡乙津村佐藤和平治ヲ率勵シ村老日名子太郎兵衛堀清左衛門松尾彦七大野六兵衛等ト相議シ奔走計畫スル處アリ東海岸ノ中央ヲトシテ東西百間南北八十間ノ防波堤ヲ築キ港口ヲ東南ニ開カントシ県廳ニ請フテ工費金八千兩ヲ借り三年二月ニ起工セシカ工未タ竣ラサルニ暴風雨ニ遭フテ破壞ス因テ県廳ニ具狀シテ修繕工費ノ不足ヲ補借シ四年五月ニ至リ全ク竣工ヲ告ケ工費前後合セテ金貳萬兩ニ及ヒシカ八年八月ノ暴風ニ又モ口岸破損シ其修繕費金四千八百圓餘ヲ要セシヲ並ニ之ヲ官ニ借り均シク年賦ヲ以テ完納セリ當時人智未タ開ケス而シテ事多クハ創業ニ屬ス當時者ノ苦心想ヲ可キナリ其後二十六年十月ノ颶風暴雨ニ口岸又々八十間餘破壞セシカ郡長齋藤利明町長高倉駒太郎等協力斡旋シテ工費金壹萬餘円ヲ官ニ仰キ修築工ヲ告ケ以テ今日ニ至レリ初メ別府寄港船舶ハ日本形帆船數隻ニ過キサリシニ六年五月日名子太郎大阪開商社ト締約シテ益丸號一隻毎月一回入港スルコトナレリ之ヲ汽船ノ當港ニ來ル嚙矢トナス何ソ圖ラン爾後四十年ノ今日大小汽船ノ往復一晝夜十數回ニ下ラサル盛況ヲ見ルニ至ラントハ時運ノ然ラシムル所ト雖モ抑モ亦人力ニ非スヤ而シテ独リ海運ノ盛如此ノミナ

ラス鐵道モ亦貫通シテ海陸ノ便並ヒ開ケ戸口増殖昔時二倍徒シ四方來浴ノ客モ亦一年間約一百餘萬人ヲ算スルニ至ル豈ニ亦盛ナラスヤ夫レ報本反始ハ人道ノ至リナリ今日繁榮ハ前人經營ノ賜タルヲ知ラハ固ヨリ其功勞ヲ銘セサル可カラス是以テ余町會議員ト相議シ爰ニ貞石ヲ波止場神社境内ニ建テ松方侯ノ題額ヲ請ヒ當時盡力者ノ姓名ヲ碑陰ニ刻シ以テ之ヲ不朽ニ傳ヘントス 乃チ其顛末ヲ略敘スルコト此ノ如シ

取締方
里正高倉定三 劉藤兵衛 森宗兵衛
指揮世話兼會計方

日名子太郎兵衛 河村伝傳衛門 堀清左衛門
野田久左衛門 荒金宗十郎 佐藤源兵衛
着到方

浅利喜兵衛 武田孫兵衛 橋本玄八 武田長兵衛 甲斐庄三郎
永井安次郎 安部徳兵衛 石井格太郎 望月藤三郎 友永小三郎
金居與助 永井長右衛門 荒金仁右衛門 佐藤清三郎
沖掛

佐藤忠左衛門 河村熊吾 河村忠右衛門 山崎辨右衛門
片野印八 甲斐峰太郎 甲斐仁右衛門 片野五左衛門 安部安右衛門
田邊久兵衛 日名子彦兵衛 秋月新兵衛 和田惣兵衛 溝口久右衛門
河村勘助 日名子長左衛門

賃錢渡方
神澤儀助 松尾彦七 大野六兵衛 安部清助
安部友藏 植木悦次郎 岡久左衛門
旅人取締

在原嘉次郎 荒金作太郎
大正元年壬子八月 別府町長從六位勳六等 吉田 嘉一郎 識
雨聲 溝口 信 書
大阪新川橋 太田 傳吉 刺



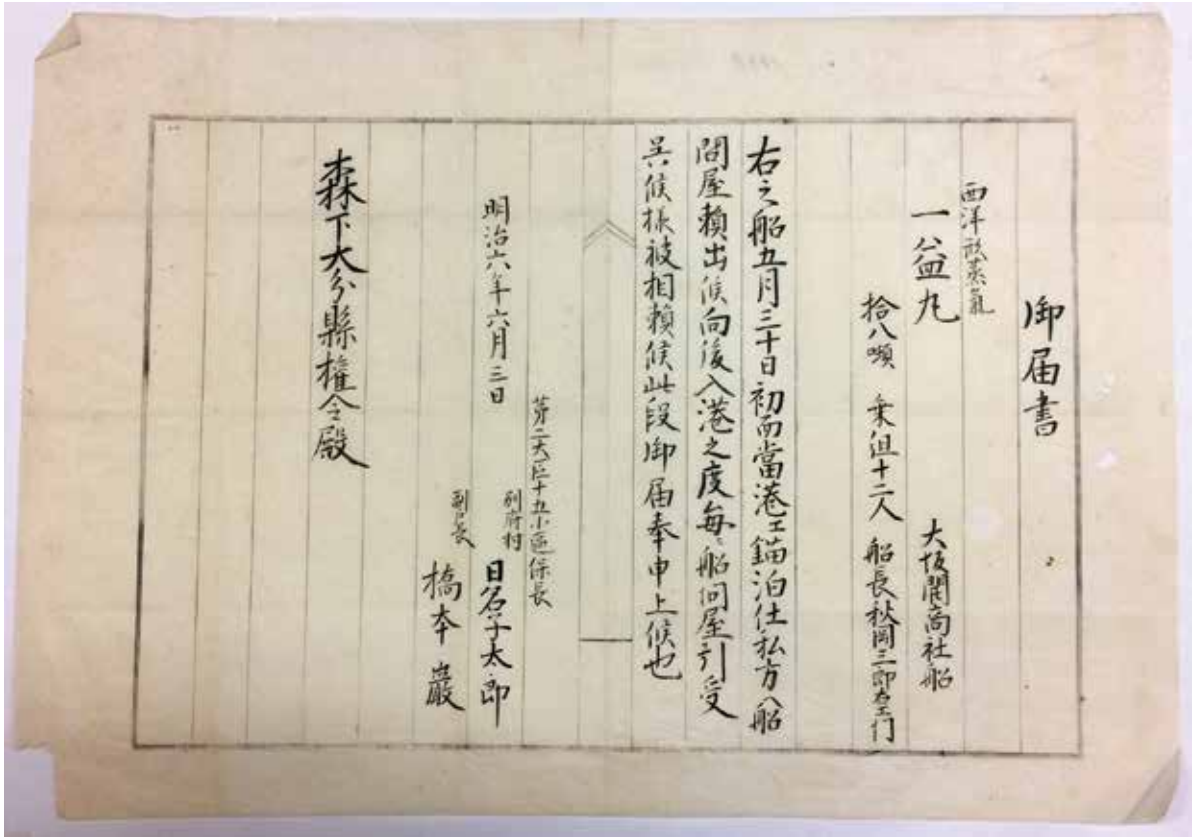
大分丸乘船券
(別府市立図書館蔵)



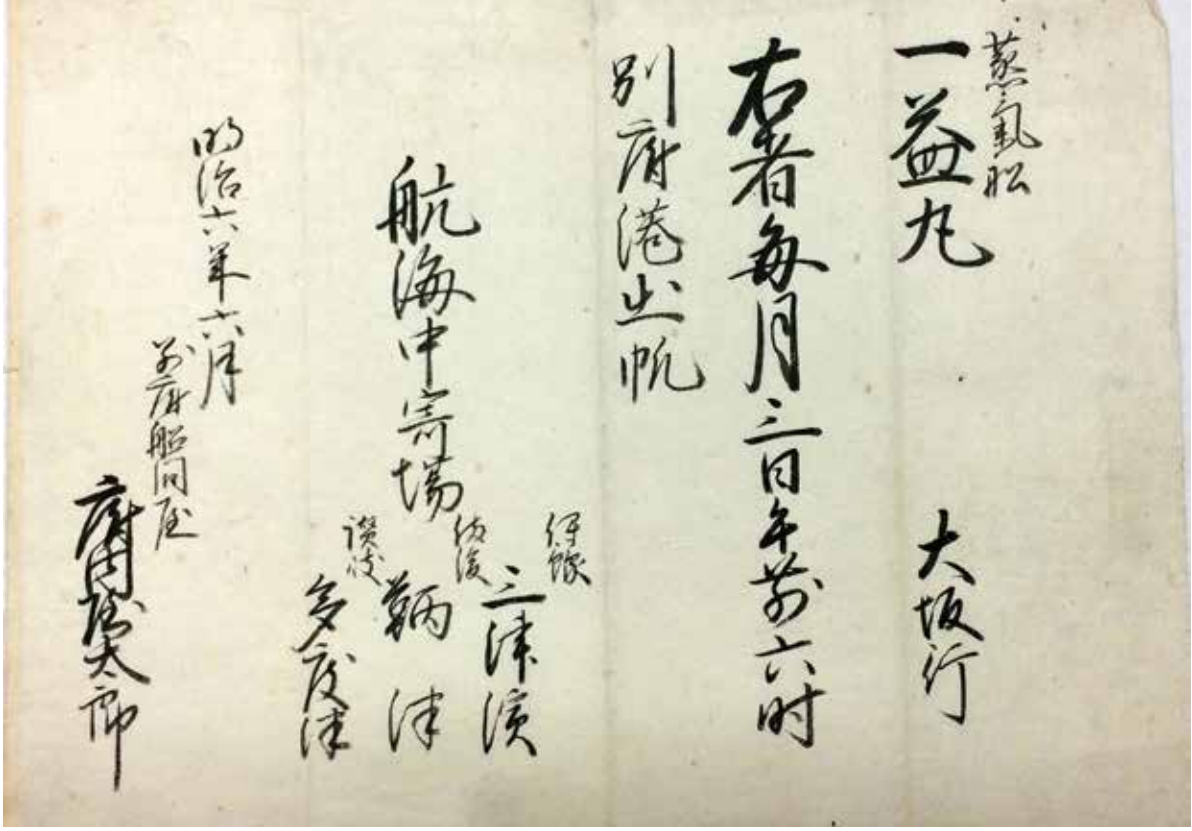
金比羅乘船券
(別府市立図書館蔵)



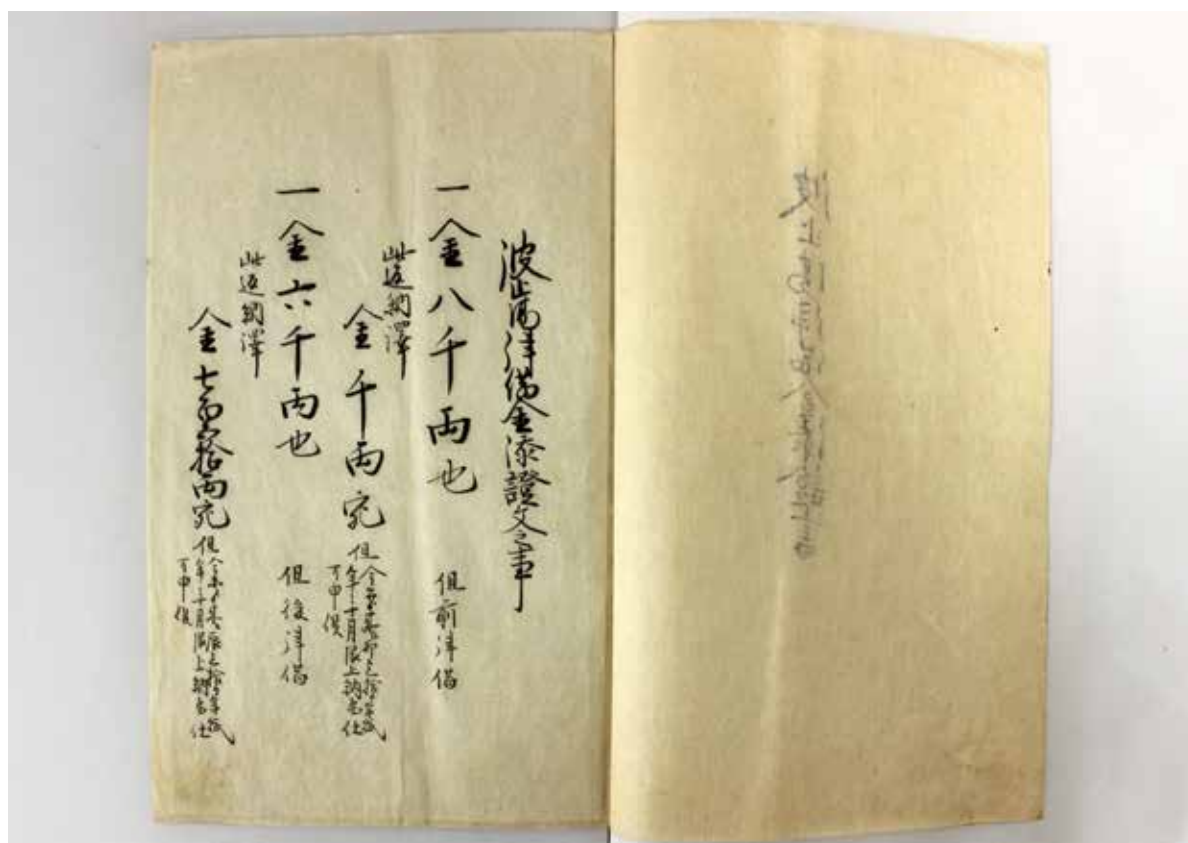
別府町実測図【明治36年】(外山健一所蔵)



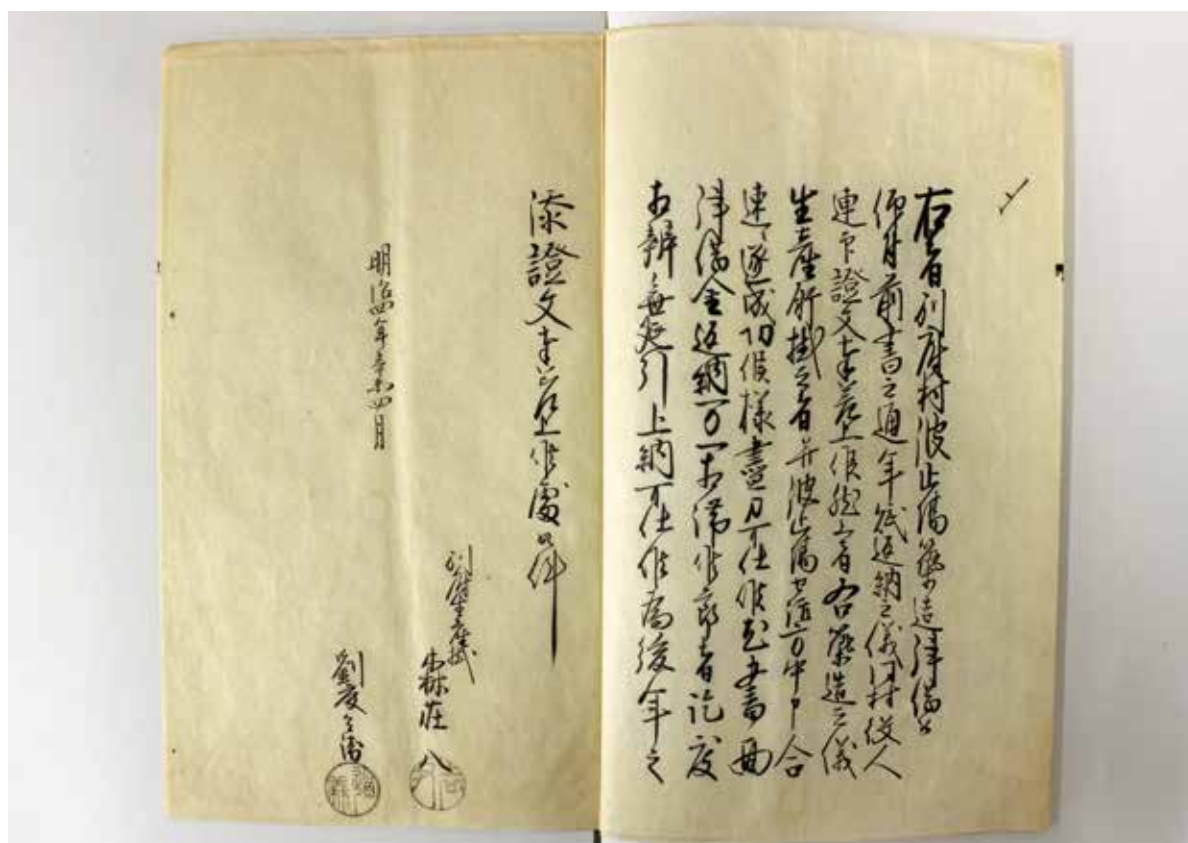
大分県権令宛「届出書」(別府市立図書館蔵)



「触書(手書広告)」(別府市立図書館蔵)



「波止場拜借金添證文之事」外山健一所藏



「波止場拜借金添證文之事」外山健一所藏

『波戸場嘆願書』

乍恐以書附奉願上候

當浦波止場之儀者生産富殖之基礎ニ而

御配下者不及申一般之爲筋幾久鋪難有仕合ニ

奉存候因二初發凡見以を以入用金八千兩奉

拜借築立來候處築石案内之不足に而府内

藩御管内四極山下海辺石之儀者已前御掛合

被下直候處於同藩茂御入用之由ヲ以睨に難

貫受無據右山下堀穿大小石少々宛相運其餘

小浦村辺遠方より取越旁以入用相増殊に當九月

六日七日兩日之風雨高波ニ而凡間數四拾間餘相

損最早壹万三千兩余ニ相成此末少金ニ而者成就

難出来且此上當場振替之手段も盡果難洩

切迫之至ニ御座候就而者御時節柄御多端之

御央御願申上兼候得共前条御汲分被仰付乍

此上金六千兩御貸渡被仰付度奉願上候

左候得者前拜借金合壹萬四千兩辻御

定則之通主法相立聊無遲滞仕解返納

可仕候當生産掛り之者共より右歎願書奉

差上候間事實御明察御許容被仰付度

此段總代以連印奉歎願候以上

午十二月

堀 清左衛門

河村傳右衛門

日名子太郎兵衛

別府

御役所

前書之通御願書奉差上候二付

奥書印形仕候以上

高倉定三

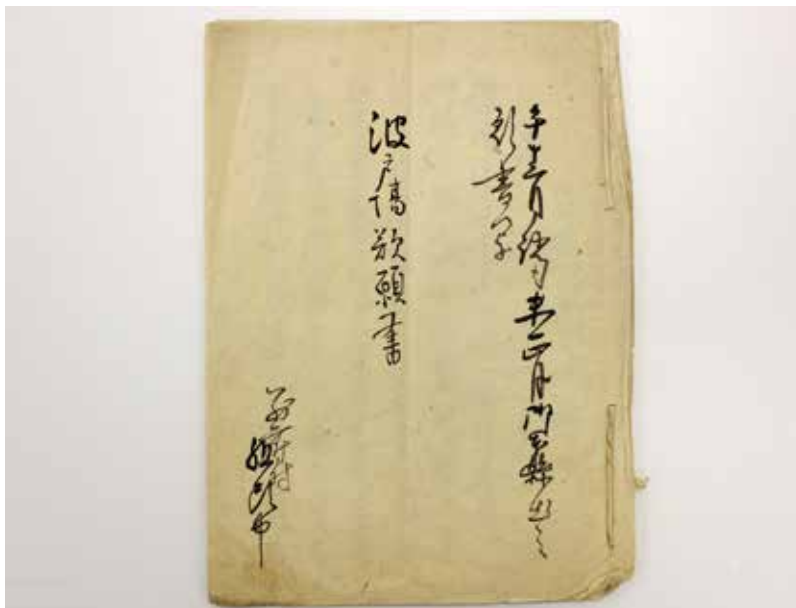
速見郡別府村

波戸場掛總代

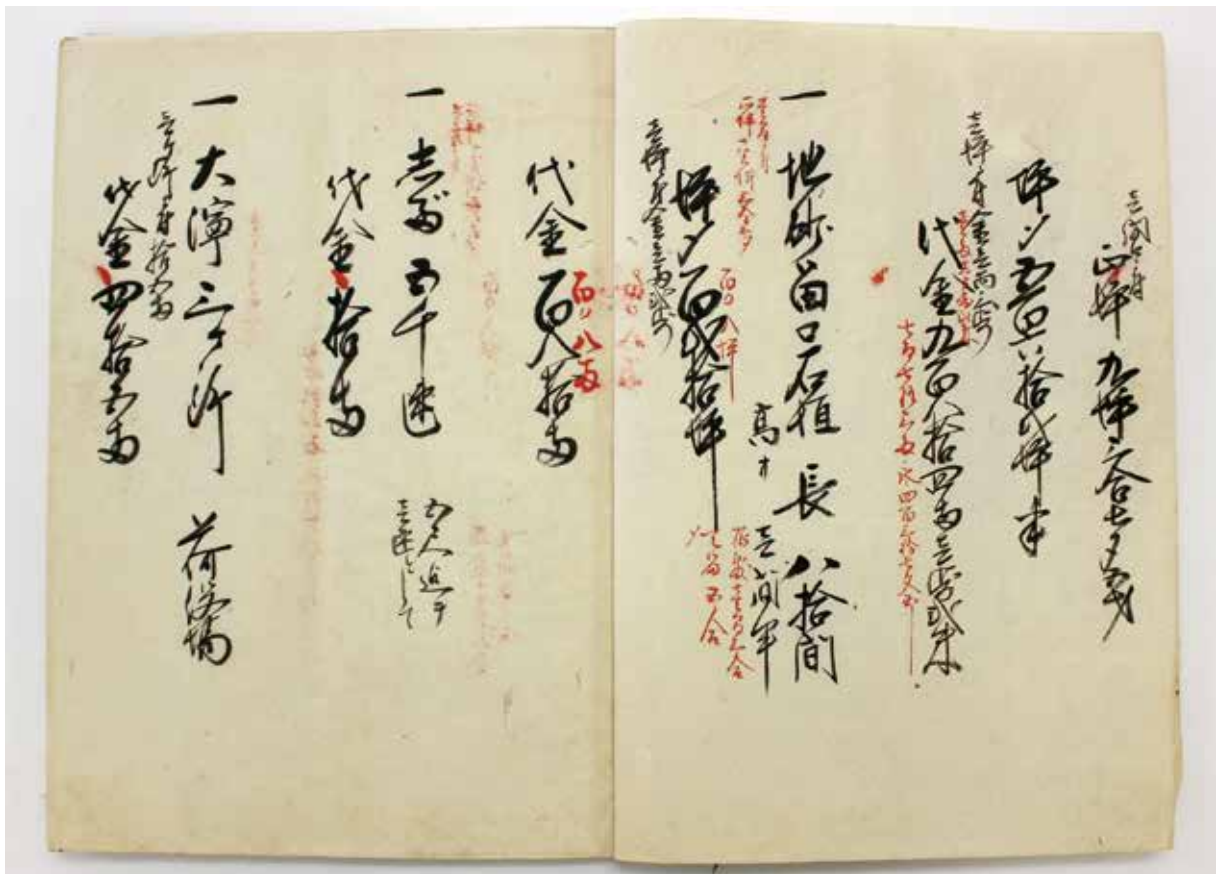
佐藤源兵衛

荒金宗十郎

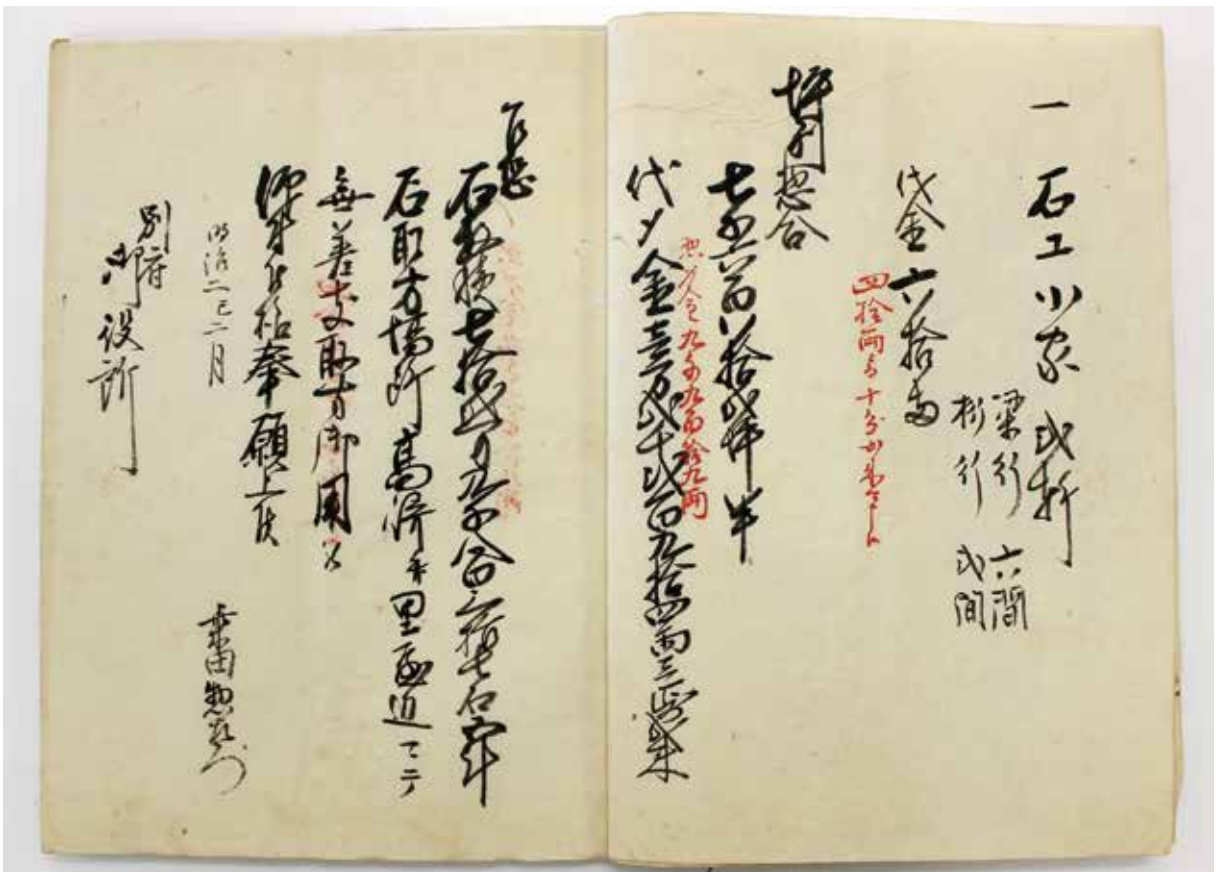
野田久左衛門



「波戸場嘆願書」外山健一所蔵



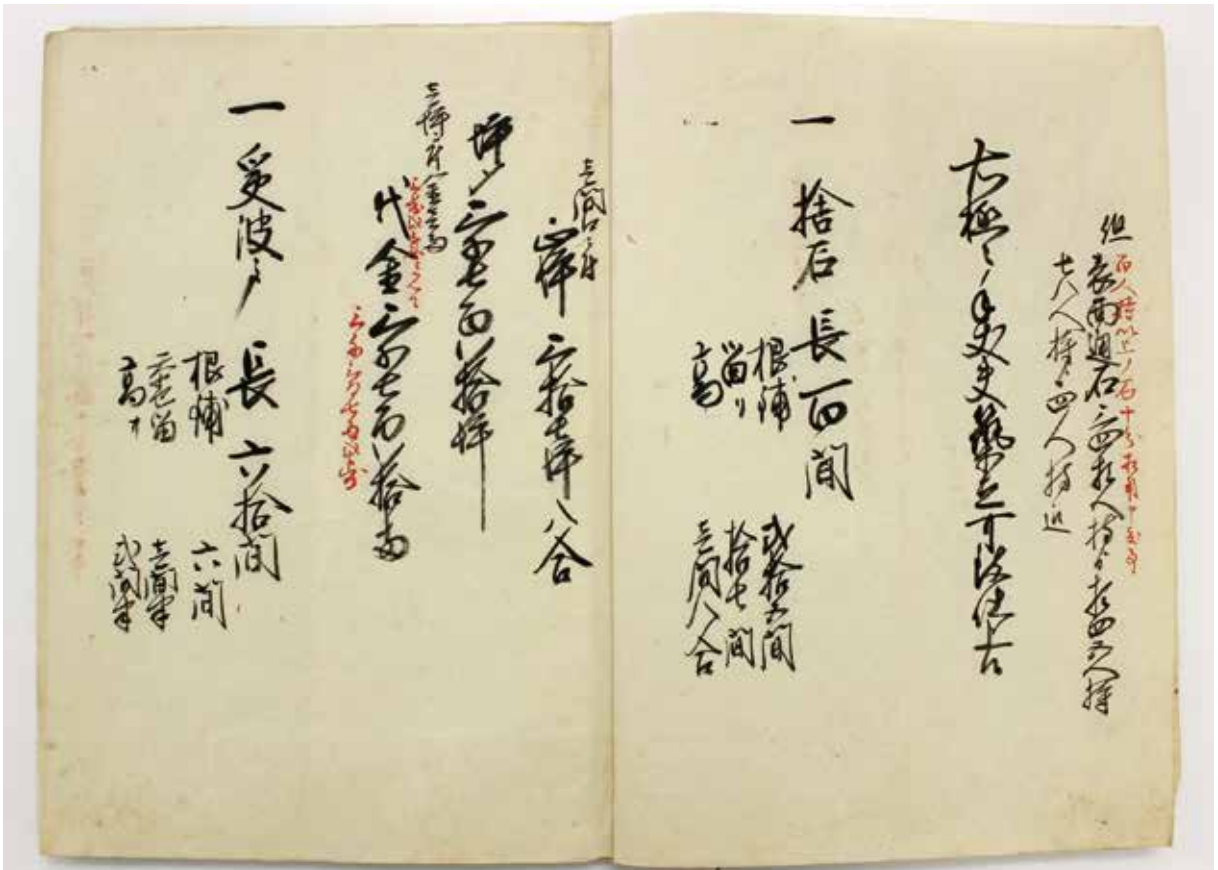
「別府新波戸築立」外山健一所蔵



「別府新波戸築立」外山健一所蔵



「別府新波戸築立」外山健一所蔵



「別府新波戸築立」外山健一所蔵



「別府新波戸築立」外山健一所蔵

『明治二年己二月

別府新波戸築立 柴田宗右衛門積書写』

一 波戸築立 長 百六拾間
 根鋪 九間
 天卷留 貳間半
 高サ 三間半
 壹間口に付
 正坪貳拾坪壹合貳勺五才
 坪×三千貳百貳拾坪
 壹坪に付金貳兩壹歩
 代金七千貳百四拾五兩
 但表面通石三四拾人持より拾四五人持
 七八人持より四人持迄
 右極々手丈夫築立可致仕上候

一 捨石 長サ百間
 根鋪 貳拾五間
 留り 拾七間
 高 壹間八合
 壹間口に付
 正坪三拾七坪八合
 坪×三千七百八拾坪
 壹坪に付金壹兩
 代金三千七百八拾兩
 一 受波戸 長 六拾間
 根鋪 六間
 天卷留 壹間半
 高サ 貳間半
 壹間口に付
 正坪 九坪三合七勺五才
 坪×五百六拾貳坪半
 壹坪に付壹兩三歩
 代金九百八拾四兩壹歩貳朱
 一 地砂留口石垣 長サ八拾間
 高サ 壹間半
 坪×百貳拾坪
 壹坪に付金壹兩貳歩
 代金百八拾兩

一枝朶 五千束 五尺迄を壹束として
 代金拾兩
 一大濶 三ヶ所 荷役場
 壹ヶ所に付金拾五兩
 代金四拾五兩
 一 石工小家 貳軒
 梁行 六間
 桁行 貳間
 代金六拾兩
 坪別惣合
 七千六百八拾貳坪半
 代金壹万貳千貳百九拾四兩壹歩貳朱
 乍恐
 石数積七拾貳万九千八百三拾七石五斗
 石取方場所高崎並に里屋邊迄
 無差支取方御用被仰付候様奉願上候
 明治二年己二月 柴田惣左衛門
 別府 御役所

参考文献

- 渡辺澄夫（1962）『大分県地方史 第28号』（安部巖）
大分県（1984）『大分県史近代篇1』
㈱大分放送（1990）『大分歴史事典』
楠本美智子（1999）『近世の地方金融と社会構造』
橋詰武彦（1975）『大分県貨幣経済史料』
矢田孝雄（1987）『矢田家乃あゆみ』
橋詰武彦（1991）『天領日田の古紙幣研究』
太田黒久夫（1977）『大分県古紙幣図譜』
日本貨幣商協同組合（2015）『日本貨幣カタログ』
別府町役場（1914）『別府町史』
別府市役所（1928）『別府市史』
別府市教育会（1933）『別府市誌』
別府市役所（1977）『別府市誌』
別府市役所（1984）『別府の海岸』
志多摩一夫（1973）『別府文化史年鑑』
別府史談会（2009）『別府の古い道歴史散歩』
大分県立公文書館（1870）「布告綴」その1・その2
手嶋宏治（2008）「港神社と別府築港記念碑文について」「別府史談第21号」別府史談会
矢島嗣久（2010）「松方正義と別府港」「別府史談第23号」別府史談会
平野資料館（平野芳弘）（2008）『波止場神社由緒記』
村松幸彦（1998）「海に緑のある神々を祀る波止場神社」「市報べっぷ」8月号
日名子文書（不明）「波止場世話掛目款」
外山健一所蔵（1907）「別府町市区改正現況実測平面図」
外山健一所蔵（1869）「北濱新波濤築建」（工事見積書）
外山健一所蔵（1870）「波止場拝借金證書」（八千両）
外山健一所蔵（1869）「波戸場嘆願書写」（六千両追加拝借）
外山健一所蔵（1871）「波止場追拝借金證書」（六千両）
外山健一所蔵（1871）「別府村波止場借金添證文」（六千両）
外山健一所蔵（1869）「御下金受取通入」
外山健一所蔵（1871）「波止場拝借金仕解」
外山健一所蔵（1871）「波止場拝借金返納仕解」

協力者

- 公益財団法人 日本海事科学振興財団「船の科学館」
大分県日田市役所・日田生産会所の所在の確認
大分県宇佐市役所・四日市生産会所の所在の確認
大分県佐伯市役所・波止場築港棟梁の出生地の確認
佐藤史彦（長崎市在住）別府生産会所の重役・佐藤和平治の親戚（敬称略）

執筆者

別府市文化財保護審議会委員 外山健一（地域近代史）

べっふの文化財 No.49

—別府築港—

平成 31 年 3 月

発 行	別府市教育委員会
編 集	別府市教育委員会 別府市文化財保護審議会
印 刷	大野印刷株式会社